



会員寄稿

経験、体験は人生の要なり

PTA役員 水本 千勢

私は大洲で生まれ、中学校まで育ちました。音楽が好きで音楽の勉強がしたかったので、高校は音楽科のある松山に進学し、同じ時期に大学に入学した兄と一緒に下宿することにしました。初めて親元を離れての生活に自由を手に入れたような感じでしたが、家事全般を一人で行わなければならない大変さがありました。

借家は、古びた平屋の一軒家で、お湯の出る蛇口はなく、お風呂もガスで沸かすものでした。冬の食器洗いは、沸かしたお湯を食器にかけてから洗いました。お風呂を沸かそうとガスをつけたままうたた寝をしてしまい、気が付けばお湯は全て蒸発し、空焚きして危うく火事を起こしかけたことも2、3度あったと思います。借家の隣には、毎日玄関に日の丸を掲げるおじさんが一人で住んでいましたが、私達には気軽に挨拶をしてくれる普通のおじさんでした。(その方は、ある日突然、自宅に火をつけてボヤ騒ぎを起こし、そのままどこかに行ってしまいました。自分で火を着けておきながら、我に返ったのか、隣の私達のことを心配したようで、帰省して留守だった家に『逃げろ!!!』とドアを破って入っていたそうです。)また高校に入るまで肱川の水を飲んでいて私には松山の水が体に合わず、肌が腫上がり激しい痒みに悩まされました。水が原因とわかるまでに半年ほどかかり、それからはこの水道水(肱川の水でさえ)も飲めなくなりました。学校生活では、東・中・南予のクラスメイトに囲まれ、おっとり南予人の私をしゃきしゃき東予人がぐいぐい引っ張ってくれ、引っ張られている私をしっかりサポートしてくれる中予人と、同じ愛媛でも気質の違いをどっぷり肌で感じました。

そんな高校生時代は、その後の私の生き方の基礎となるものを作り上げたように思います。高校卒業後に進学した東京での大学生活や2か月程度ではありますが海外での生活で、たくさんのお話を体験しながら上手く対応できたことは、親から離れて過ごした高校3年間の生活で体験したことのおかげかなと思っています。もちろん、一番は、全てを許し、見守ってくれた両親のおかげだと感謝しています。

現在、世界全体が新型コロナウイルス感染症の為、全てにおいて厳しい制限があり、自由に行動が出来ませんが、元の生活に戻れた時、みなさんには今しかない若さに行動力をプラスして、たくさん素晴らしい体験をし、最高の人生を送ってほしいと思います。

